

は資料整理のいわば理想的な形態を示すものと言えよう。

HRAF は 1949 年にユール大学に創設されたが、その創設前に 20 年ほどの前史を有している。したがって今日までにすでに 35 年余の歴史を持つが、その間ファイルは絶え間なく成長を続けてきている。たとえば 1962 年から 64 年にかけて、スリップの数は 165 万枚から 220 万枚までに成長している。今後ともますますファイルは大きく成長していくであろう。

HRAF のファイル・コピーには、Original copies と Micro copies の二種がある。Original copies は正式のメンバーにのみ配布される。京都大学はアジア地域における唯一の正式メンバーであるから、Original copies のあるのはアジア地域では本館のみである。Micro copies は国内でも 2 か所に備えられているが、ファイル自体がさきに述べたように成長していくものであるから、その点 Micro copies では、ファイルの成長に追いつけない。

HRAF のような貴重な資料集成が本館に設置され、図書館活動の一環として運営されることになったのはこの上ない喜びである。いま開室を前に資料整理の最後の迫込みに入っているが、HRAF 室が正式に開室されたとき、研究者に与える利便は実に大きいものである。

図 書 館 と の 4 年 間

I

H・A 生

図書館は、僕にとってある意味では空気のような存在であった。日頃は惰性的に利用するのみでそれ程その存在の貴重さを自覚していた訳ではないが、いざ卒業ということになって開き直って考えてみると、教室の延長として、また書斎の代替物として、あるいはまた観念的、クラブ活動の場として、なんと色々な必要不可欠の物質的手段をわれわれに提供してくれてきたかという事に思い至り、いまさらながら湧き出づる感謝の念を禁じえない次第である。

しかしここでは、かような感謝のために 4 年間の回顧を無批判に展開することをやめ、改善が比較的容易だと見られる現実の図書館についての不平不満をちょっぴり披瀝してみたい。図書館の近代化のためのなにかの参考となれば幸である。

1. 学習は閉鎖的であつ静かな環境でやれとはよくいわれる言葉である。だが閲覧室の現状はどうだろう。長い中央の通路を闊歩する足音、うち興ずる談笑、イスのきしむ音、見え隠れする人の姿、その他様々な聴覚的視覚的刺激の氾濫が、さ程神経過敏でない人々をも苦しめ、知らず知らずのうちに勉強の能率を低下させているのではなかろうか。これら館内の開放性に起因する障害は、例えば閲覧室を三つぐらいに区切って機能分化し、ひとつの部屋は娯楽本位に図書館を利用する人のための雑誌室（談話や喫煙を許し、廊下のソファはここに移す）。他は文科系学習室、理科系学習室と配分するという風に工夫することにより、大いに緩和されうと思われる。グループ学習者専用の部屋も作るに越したことはない。こうすれば、夏の通風の問題は残るが、静寂のしじまに包まれて空想の世界を天翔るための条件がずっとよくなると思

われる。

2. 諸々の事情で昼休みに図書を借出す必要に迫られる学生は実に多いと思われるが、係の人の休憩時間は11時～12時、または1時～2時として便宜を計ってもらえないものか。

3. 10月や2月の試験期は、開架の書籍でも夜8時から朝9時の間館外帯出を認めたり（期限内に返さぬ者には以後の利用を拒絶する等の制裁を考える）、混雑のあまり閲覧者の席がなくなる時は一階の空いている部屋をこれにあてる等の試験期に対応した弾力的なサービスが考えられて当然ではなかろうか？

4. 他人の引いた赤線で本が真赤に泣い

ていたり、ひどい場合には無惨にも重要箇所のみページぐち剥ぎ取られていたりして後の利用者は非常な迷惑を蒙っているが、図書が返却された時は一々汚損が加えられていないかをその場で検査し厳しく取締ってもらえないだろうか？

その他、新刊書をもっと早く利用出来るようにしてもらいたい、利用度の高い教科書類は複数購入してもらいたい、冬のストーブによる空気汚染に対してもっと有効な換気措置を講じてもらいたい等欲を云えばキリがないが、こういう不平に勝るとも劣らぬ程図書館への愛着や感謝を胸に抱いていることを強調しつつ擱筆することにする。

（法学部4回生）

II

奥田秀毅

時の経つのははやい。もう卒業……。4年間何をし、何が残ったか？何も残らなかった。残念ながら「俺は大学時代にこれをやったんだ」と人に誇れるものはない。しかしこれでいいんだと思う。「予定のコースである」……と云い切れば嘘になるだろうが、満更嘘でもない。ぼくだって入学当初は勢いこんでいた。勉強もし有意義な充実した生活をしたと思った。何かスタンブレイも演じてみたかった。だが、やがて考えが変わってきた。大学在学中は意識的な blind days にしてやろうと。

そう思ってから生活が愉しくなった。勉強しなければならないと云う高校時代から続いていた圧迫感から逃れ得た。充実した生活をと云う緊張感から解放された。五月の空は青かった。それからいろんな事に食いついていった。紅灯の巷も歩いた、旅行もした、遊びも覚えた、工場で工具さんと共に働いたこともあった、恋愛もした、友人知己もたくさんできた。その間、人並みに悩み、苦しんだ、考えた。そして気が

つけば卒業が目前に控えていた。

大学生と云うものが専門知識を身につけていなければならないものとすれば、ぼくは完全に失格である。しかし、ぼくの当初の意図は大体果せた。ぼくでも努力することさえ忘れなければ人と十分伍していけるし、自分が先頭にたってやれば、そしてそれが意味のあることであれば人も自分についてくると云うことを肌で知ったことは大きな収穫であった。

ぼくの4年間の生活も今の平均の大学生の姿かもしれない。そこにはあまり大学図書館とのつながりはなかった。何が原因かをぼくなり分析しないでもないがすでに紙数はつきた。一言だけ述べたい。京大と云う大学の性質の問題も絡んでくるのだが図書館を学生のものにするか、大学院学生を始めとする研究者・学者を対象とするかを方針として決めることは必要だと思う。学生のものにするには教養部の図書室も本部の図書館も、ぼくの知る限りでは貧弱であった。そのために自分で買って読む方が手軽で便利だったし、おかげで本がたくさんたまつたような次第である。

（薬学部4回生）